

屏風でつながるバチカンと日本

16世紀、日本の大名が安土に築城するも数年で廃城。

城の様子を描かせた屏風はイエズス会士に贈られ、教皇に献上。現在は行方知れず。

1576年に織田信長という大名が滋賀県の安土に天下統一の拠点を置き築城、荘厳な城は3年後に竣工した。しかし、当時の日本で内乱が続く中、1582年に城は焼け落ちた。原因は不明だが、宣教師の記録では、織田信長の息子が火をつけて破壊した、とされる。

遠い昔の話が、最近バチカンを訪問した滋賀県副知事率いる調査団によって再び掘り起こされた。城と城下町の風景が詳細に描かれた貴重な屏風が、1581年に織田信長よりアブルッツォ州出身のイエズス会士、アレッシンドロ・ヴァリニャーノ（1539～1606）に贈呈されたという確かな証拠が残っている。ヴァリニャーノ師はその屏風を、初の遣欧使節団となった4名の少年に預け、教皇グレゴリウス13世（1502～1585）への贈呈品としてローマに送った。記録によれば、1585年に永遠の都に到着した少年らはヴァリニャーノ師に任された任務を全うし、また、日本から贈られた屏風を気に入った教皇は、いわゆる「地図の間」に展示したという。

時が経つとともに、バチカンでは屏風の行方と記憶が失われた。しかし、日本においては、より正確には、かつて安土城が築かれた地において、数十年前から城に関する資料を集める取り組みが活発になっている。その目的のため、「Azuchi Screens Research Network」という複数の研究者からなる国際ネットワークも誕生した。今、同ネットワークの活動範囲は日本と西洋との文化交流まで拡大している。また、滋賀県は、城に関する情報収集への協力を呼びかけるために、情報提供用のメールアドレスも記載した6か国語によるチラシも配布している。

「失われた屏風」の探検をめぐる最新の取り組みは、2022年8月から滋賀県副知事を務める大杉住子氏（49歳）のローマ訪問である。訪問の最後に、アベニーレ紙が駐バチカン日本大使の千葉明氏の公邸に於いて副知事の取材を行った。

大杉氏は「今後数年のうち、バチカンと日本、特に滋賀県との関係において2つの重要な周年を迎える。2025年は初遣欧使節団のローマ訪問440周年にあたる。また、2030年は、1580年に現・滋賀県の安土に建てられた、日本における最初のカトリック神学校の創立450周年にあたる」と説明した。それは、屏風の行方を突き止める企画も含めた、教皇庁との文化交流を強化するきっかけとなった。副知事は、文化教育省長官のトレンティノ・デ・メンドンサ枢機卿、国務省総務長官のペーニャ・パーラ大司教、バチカン図書館・文書館館長のザーニ大司教などの教皇庁高官と面会。「屏風について協議し、屏風に関する情報収集への協力につき約束を得た。屏風には、安土城のみならず、神学校を含む街の風景も描かれているので、高い関心を持たれた、と明らかにした。また、会談ではイエズス会のアーカイブでの調査など、探検を広げるためのアドバイスも出た。副知事自身はもちろんローマに頻繁に来ることは叶わないが、協力を希望する研究者は、在バチカン大使館に連絡することができる。

屏風は紙や木材などという傷みやすい材料でできている。大杉氏は、「（探検は）困難とは承知しているが、不可能ではない」旨述べた。大阪城が描かれた、16世紀末期、つまり安土山図屏風とほぼ同時代の屏風が近年になってオーストリアで発見された例もある。「失われた屏風」の探検を続けるための更なる理由である。